園庭より(19)

時の標(しるし)

松井　とし

かつて子どもたちが遊び、うさぎ一家がくつろいだ幼稚園の庭は、都会の一隅の小さな空間に過ぎなかったが、私たちに四季折々の自然と安らぎを感じさせてくれた。園庭の隅に植えられた桜は年毎に成長し、入園式には満開だった。垣根のバラがこぼれるように咲く頃には、花びらづくし。ままごとのケーキを作ったり、首飾りを作ったりして遊んだ。小さな芝生でもござをしいて食べるお弁当は、遠足の時のようにおいしかった。うさぎたちはクローバーが大好物で黙々とよく食べ、幸せそうだった。

夏になると、傍らにカンナの花咲く「ジャブジャブ池」で水浴びをしたり、園庭中をどろんこにして遊ぶ子どもたちの歓声がこだました。大騒ぎのシャワーと着替えを終え、ほっとして外の緑に目をやると、テラスの花壇に風船かずらが揺れていた。

二学期は生い茂った雑草の中の虫とりと、おしろい花やあさがおの色水づくりで始まった。ジャングルジムの上に、大きく枝を張ったしいの木からは、帽子をかぶったままのつやつやしたどんぐりが落ちた。木枯らしが吹く頃になると、少ない落葉をみんなで一生懸命集めて焚き、やきいもを作ってふうふう言いながら食べ

た。

園庭をとり囲む植え込みに、真白い水仙が香り良く咲き始めると、いよいよ冬将軍の到来。ビルの日陰になって冷たい風が吹き抜けても、子どもたちは元気いっぱい。毎日サッカーに興じていた。

ささやかながら自然とともに子どもたちが暮らす平和な園は、生きるものにとってオアシスだったのだろうか。迷子の犬やリス、カメ等の突然の来訪者に驚かされたこともしばしばであった。最後の頃には、野鳥も訪ねてくるようになり、本を片手にバードウオッチングを楽しむことができた。テラスの雨どいの中では、毎年雀のひながかえり賑やかなことだった。

歴史を閉じてもなお、しばらくはカーテンを引いたままで、まるで夏休み中のように、幼稚園は静かなたたずまいだった。しかしその夏の終わりに訪ねてみると、工事用の白いビニールが全てを覆い隠してしまっていた。中には毎朝子どもたちが「おはようございます！」と駆け抜けたバラのアーチ門や固定遊具類が転がっていた。

次に訪ねた時には、建て替え予定の隣の県立高校の建物も取り壊され、何もかも全てが消えてなくなっていた。整地された広い敷地がはるか向こうの道路まで続き、もはやどこまでが、あの園庭だったのか、見当もつかなかった。

あれから二年余り経ち、幼稚園のあった場所は高校のテニスコートに生まれ変わった。その片隅には「時の標」と刻まれた記念碑が粛然と建っているだけである。

（元・幼稚園教諭）